

The Great Gatsby における色彩のイメージ

山中 祐子

(受付 2008 年 10 月 29 日)

はじめに

F. Scott Fitzgerald (1896-1940) と多くの類似点のある *The Great Gatsby* の主人公である Gatsby は、身分の差のある金持ちの女性 Daisy と結婚する目標を掲げ、その夢を見続けたが実現することはなく悲劇的な結果に終わってしまう。Fitzgerald は、この小説を“意図的”に芸術的に仕上げようとした。それではどのようにして、“意図的”に芸術的に仕上げたのであろうか？ まず最初に、イメージ、特に“the ashes”と“dust”，及び“green light”においてその意図が表れていると考えられるので、これらのイメージ群について論述してみたい。次に、芸術的と思われるその色彩についても考えていきたい。

1. “ash heaps” と “a valley of ashes”

この小説のタイトルには興味深い事実がある。Fitzgerald はこの作品に題をつける際、最初から *The Great Gatsby* (1925) としていたのではない。当初、*Among the Ash Heaps and Millionaires* としたものを、*The Great Gatsby* に変更し、さらに *Trimalchio in West Egg* とし、迷ったあげく、再び *The Great Gatsby* に戻した。*Among the Ash Heaps and Millionaires* としようとしたのは、Tom のように先祖から富あるいは財産を受け継いだ「富める者」と、Gatsby のように身一つから自力で稼ぎ出す「富まざる者」の対比、そこからもたらされた“green light”に象徴される夢や、幻想のロマンスが、この小説を強烈に印象づけているためだが、しかし最終的には、Fitzgerald の妻 Zelda の提案を受け入れ、*The Great Gatsby* に決定した。

この作品の中で、“ash heaps”のある“a valley of ashes”は、West Egg から New York に向かう途中、どうしても通り抜けなければならない谷である。それは大都会の腐敗と不安、絶望、焦燥などの象徴である。Gatsby 邸でのパーティーや車のきらびやかな色が連続するこの作品においては、“ash heaps”は奇異な印象を放つ。しかしその奇異な感じは、そこをとりまく夢の世界と対比した際に生じるものであり、この谷は、その世界とは全くかけはなれた生活臭さを感じさせる「現実の世界」ともなっている。全てのものを灰という無にしてし

まうこの谷間は荒廃や死滅の予感も漂わせている。灰の谷は、灰を舞いあげ、高級車を飛ばしてここを通過しようとする者を飲み込もうと待ち伏せしているのである。この不毛の土地を Fitzgerald が T. S. Eliot の有名な詩の表題と同じく、「荒地」と呼んでいるのは極めて示唆的といえるだろう。Nick が中西部にやってきて投げ込まれた状況は、まさしく Eliot の「荒地」と同質で、現代の荒廃と不毛、さらには精神的墮落を暗示している。Eliot が *The Great Gatsby* にとっても感動したのは、Fitzgerald の中に現代物質文明の陰に宿る破壊力に対する警告を読み取ったためであろう。

Fitzgerald がこの小説に *Among the Ash Heaps and Millionaires* と最初にタイトルをつけたかったのは、“ash heaps”にいくつかの特別な象徴的意味を含ませていたからである。

About half way between West Egg and New York the motor road hastily joins the railroad and runs beside it for a quarter of a mile, so as to shrink away from a certain desolate area of land. This is a valley of ashes—a fantastic farm where ashes grow like wheat into ridges and hills and grotesque gardens; where ashes take the forms of houses and chimneys and rising smoke and, finally, with a transcendent effort, of men who move dimly and already crumbling through the powdery air. Occasionally a line of gray cars crawls along an invisible track, gives out a ghastly creak, and comes to rest, and immediately the ash-gray men swarm up with leaden spades and stir up an impenetrable cloud, which screens their obscure operations from your sight. (p. 23)¹⁾

この部分のある言葉をつないでいくと、牧歌的風景になる。それは、谷、農場、小麦、山、丘、菜園、(農)家、煙突、煙、(農場の)男、鋤などの、山と丘に囲まれた谷間の中の煙の立ち昇る農家と麦畑と菜園と農夫がみられる農園の風景である。緑豊かな田園風景だ。ところが実際はそこは、灰色の風景で灰色の人間が出現する「荒涼とした土地」に他ならない。そこは生産だけでなく消費の場、荒廃した投棄場である。田園のイメージを呼び起こすだけに一層その荒涼性、不毛性が際立っている。

この小説の他の場面では *Gatsby* の大邸宅での豪華なパーティーや、色とりどりの車などの多くの華やかなシーンがあるので、この“ash heaps”はとても奇妙な感じを与えている。しかし、“ash heaps”と夢の世界を比較する故に奇妙さが生じてくるのである。“ash heaps”の世界は夢の世界とはかけ離れており、死と破滅の予感を漂わせている。“a valley of ashes”は灰を撒き散らして豪華な車でここを通過しようとする人間を飲み込もうと待ち伏せている。

1) F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby* (New York: Charles Scribner's Sons, 1925).

Fitzgerald が T. S. Eliot の「荒地」と同じように、この荒涼とした地を “the waste land” と呼んだのは重要である。Nick が初めて東部に来て身を投じた世界も “the waste land” と同じであり、それは現代社会の孤独、不毛性、道徳的腐敗を暗示している。

“ash-gray men” は実際の人間であるけれども、彼らは、 “move dimly and already crumbling through the powdery air” (p. 23) であり、 “swarm up with leaden spades” (p. 23) なのである。彼らは、灰から生まれ、灰に生き、同時に灰として死んでいく。

このシーンは “dismal scene” であり、この “ash valleys” は燃え尽きた物質としての灰が示すようにすべてのエネルギーを消費しつくし、いかなる原動力をも喪失した残骸の集積である。語り手はこの情景を the gray land と表現している。また、 “the spasms of bleak dust which drift endlessly over it.” (p. 23) の “spasms” はこの作品で重要と言える。“spasm” の原意は、「筋肉が無意識に発作的に収縮すること」(Webster’s Third New International Dictionary) であって、それは意識と目的を欠如した動きのことであり、“bleak dust” は風のままに「絶えず漂う」結果になる。それを “gray-men” に適用すれば、すでに生命力を失い、意識と目的を欠き、時に発作的に行動はするものの、ただ周囲の動きのままに漂う残骸的存在を表現している。つまり彼らは、残骸的人間なのである。

2. “ashes” と登場人物

次にそうした残骸的人間の具体例をあげて行きたい。最も残骸的人間の具体例は、Wilson である。そもそも彼は、 “this shadow of a garage” (p. 25) の所有者であり、彼の家は、 “on the edge of the waste land, a sort of compact Main Street ministering to it, and contiguous to absolutely nothing.” (p. 24) に位置し、その様子について、 “The interior was unprosperous and bare: the only car visible was the dust-covered wreck of a Ford which crouched in a dim corner.” (p. 25) と描かれる場所に彼は住んでいる。彼は、 “spiritless man, anaemic” (p. 25) で、まるで幽霊のようで “mingling immediately with the cement color of the walls. A white ashen dust veiled his dark suit and his pale hair as it veiled everything in the vicinity...” (p. 26) とあるように、Wilson は “ash-gray man” ともいえる。人は明らかにこういう人間を死の影として避けようとする。ちょうど自動車道路が「荒涼とした地域」を避けるように、である。しかし、この “ash-gray Wilson” が少なくとも対照的に活力や色彩にあふれている Gatsby を殺してしまうのは、この小説のアイロニーである。このように考えてみると、“dust” は登場人物の各々に何らかの関わりがあると考えられる。次に、Wilson の妻、Myrtle を取り上げてみる。

Myrtle は、貧血気味の Wilson とは違い、多血症である。Myrtle の血が決定的に流れ出る

のは Daisy が運転する車にはねられた時である。

Myrtle Wilson, her life violently extinguished, knelt in the road and mingled her thick dark blood with the dust. (p. 138)

彼女の濃い血液は活力の源だったのだ。そして、それは灰の橋梁たる dust と同じ dust に混じったのである。“The mouth was wide open and ripped at the corners, as though she had choked a little in giving up the tremendous vitality she had stored so long.” (p. 138) とあるように、Myrtle の活力は自己破壊的な活力であった。その活力は“dust”に帰する運命であった。というよりは本質的に“dust”のようなものだったのである。最終的に Myrtle は“dust-man”の夫 Wilson と一体化してしまう。

次に、Myrtle を愛人に持つ Tom Buchanan について考えれば、“had been one of the most powerful ends that ever played football at New Haven—a national figure”, “everything afterward savors of anti-climax.” (p. 6) であり、Nick は Tom について次のように語っている。

Why they came East I don't know. They had spent a year in France for no particular reason, and then drifted here and there unrestfully wherever people played polo and were rich together. ..., but I felt that Tom would drift on forever seeking, a little wistfully, for the dramatic turbulence of some irrecoverable football game. (p. 6)

Nick が分析しているように Tom は永遠にさまよい続けている。Tom は失ったゴールを探し続け、なおも活力に溢れており“dust”とは対照的のようではあるが、内面は本質的に“dust”と変わりはない。結局は永遠に漂い続ける存在に他ならない。

同様に“dust”や漂うもののイメージは Daisy にも存在する。Gatsby が戦争に行き、帰還するのが遅れたころ、Daisy は華やかな社交界の生活に日夜明け暮れていた。

All night the saxophones wailed the hopeless comment of the “Beale Street Blues” while a hundred pairs of golden and silver slippers shuffled the shining dust. At the gray tea hour there were always rooms that throbbed incessantly with this low, sweet fever, while fresh faces drifted here and there like rose petals blown by the sad horns around the floor. (p. 151)

つまり、Daisy にとっては、自分の属する世界は、“fresh faces drifted here and there”であ

り、すなわちそれは“the shining dust”と同じものであった。彼女は結婚後も、一か所に落ち着くことなく転居を繰り返し、あちこちに漂うために、そのイメージは変わってはいない。Daisy は、Tom の妻として我々の前に姿を見せた時、微風に乗って吹かれている女性、軽やかに漂っている存在であることを印象づけている。Daisy は常にきらめき漂う“dust”なのである。

語り手である Nick はこう述べている。“No—Gatsby turned out all right at the end; it is what preyed on Gatsby, what foul dust floated in the wake of his dreams...” (p. 2) おそらく Nick のこの“foul dust”は、Buchanan 夫妻と Wilson 夫妻を指している。彼らは、確かに、夢を追う航海者 Gatsby にまわりついた“dust”であった。これらの“dust”は各々登場人物に深く結びついた“ashes, drift endlessly”のイメージを我々に与えている。最後に、結局 Daisy に見捨てられたことを悟った Gatsby について、Nick は、次のように想像する。

He must have felt that he had lost the old warm world, paid a high price for living too long with a single dream.... A new world, material without being real, where poor ghosts, breathing dreams like air, drifted fortuitously about...like that ashen, fantastic figure gliding toward him through the amorphous trees. (p. 162)

夢を失った Gatsby にとって、“the old warm world”はにわかに悪魔的世界、幽鬼がさまよう「新世界」となってしまう。彼の夢の対象であったさまよう者である Daisy を追い求めた Gatsby もまた、「漂う者」にならなければならない。Gatsby は、偶然にも Wilson と同じようにさまよい始める。Wilson は Gatsby を殺し、そのあと自殺する。ここで Wilson は Gatsby を殺さなくとも他の手段に訴えることもできたわけであるし、また Gatsby を殺したあと、同じようにピストル自殺をすることもなかったのである。何故二人ともここで死んでしまったのであろうか。この二人は the “spasms of bleak dust which drift endlessly over it.” (p. 23) のイメージによって結ばれていたと思われる。

Gatsby の dust のイメージは、Gatsby の最期にも現れている。Gatsby が殺される前夜、Nick と巻煙草を探して大きな部屋を歩き回った時、“There was an inexplicable amount of dust everywhere.” (p. 147) であった。Gatsby と関連した“dust”と“drift”のイメージはプールに漂う Gatsby の死体の描写にも美しく表現されている。

There was a faint, barely perceptible movement of the water as the fresh flow from one end urged its way toward the drain at the other. With little ripples that were hardly the shadows of waves, the laden mattress moved irregularly down the pool. A small gust of

wind that scarcely corrugated the surface was enough to disturb its accidental course with its accidental burden. The touch of a cluster of leaves resolved it slowly, tracing, like the leg of transit, a thin red circle in the water. (pp. 162-63)

ここで興味深いのは、Fitzgerald は殺された Gatsby の顔の表情や体については何も述べておらず、ただ Gatsby の体が横たわっているマットレスの動きだけに焦点をあてていることである。プールの僅かな動きにつれて、マットレスが不規則に動く。プールの水面を波立たせるかどうかの風でさえも、乱してしまう。一群の落ち葉に触れてもゆっくりと旋回する。

こうした動きと方向は、外の力に完全に支配された“drift”を示している。この“drift”は荒地に漂う“dust”と本質的に異なるものではない。この荒地にある“ash heaps”について、Lehan は、

As the illusion of youth give way to the disillusionment of thirties, so green hopes give way to the dust of disappointment. Certainly Gatsby's dreams turn to ashes; and it is dramatically and thematically appropriate that the custodian of the Valley of Ashes, George Wilson, should be Gatsby's murderer.²⁾

と述べている。また、“ash heaps”の存在する“Waste Land”の看板を取り上げ、次のように述べている。

Gatsby is a kind of Eckleburg: he has created a godlike image of himself, but the image is doomed—the dream will turn to dust—and like Eckleburg, Gatsby also has occasion to brood over the ashes of the past, over the “solemn dumping ground” of worn out hopes.³⁾

つまり、Lehan の述べている“green hopes”である Gatsby の夢は、ついには、“dust”、“ashes”に帰してしまうのである。

3. 色彩のイメージ

ここで、Nick が“dust”、“ashes”と対比しているものに“green hopes”、具体的に言うと

2) Richard F. Lehan, *Scott Fitzgerald and The Craft of Fiction* (London and Amsterdam; Southern Illinois University press, 1966), p. 120

3) Lehan, p. 121.

Gatsby が Daisy だと思い守り続けてきた “the green light” があげられる。過去を取り戻そうとしている Gatsby の上に、これから起こる出来事を我々に、明示する道具として、Gatsby と価値観の違う Nick は、“the green light” を使おうとしている。“the green light” は小説の中で5度言及されている。最初は、第一章の最後、“Involuntarily I glanced seaward—and distinguished nothing except a single green light, minute and far away, that might have been the end of a dock,” (pp. 21-22) である。二番目は、Gatsby 邸を Daisy が訪ねた時に、“If it wasn’t for the mist we could see your home across the bay,” said Gatsby. “You always have a green light that burns all night at the end of your dock.” (p. 94) と Gatsby は述べている。3番目は、“Now it was again a green light on a dock.” (p. 94) で、4番目は、“I thought of Gatsby’s wonder when he first picked out the green light at the end of Daisy’s dock.” (p. 182) であり、これがまさしく Gatsby 本人の夢見た「Daisy の住むイーストエッグの緑の灯」である。そしてこの小説の最後に、“Gatsby believed in the green light, the orgiastic future that year by year recedes before us. It eluded us then, but that’s no matter—tomorrow we will run faster, stretch out our arms farther.... And one fine morning—” (p. 182) とあるように、幸福を約束する未来を信じていた Gatsby の夢は果たせないまま終わってしまう。その第一章の最後に出てくる “the green light” について、Kathleen Parkinson は

The green light burning at the end of her dock has exercised a hold over his imagination because it symbolizes the unattainable; ‘It had seemed as close as a star to the moon.’ Daisy’s actual presence with her arm through his reduces the green light to its ordinary identity.⁴⁾

と述べ、また Marius Bewley が、

The green light is successful because, apart from its visual effectiveness as it gleams across the bay, it embodies the profound naivete of Gatsby’s sense of the future, while simultaneously suggesting the historicity of his hope.⁵⁾

と述べているように、“the green light” は Gatsby 個人の夢を表わしているが、Gatsby の夢を歴史的に考えると American Dream に結びつくと考えられる。Gatsby にとっての “the

4) Kathleen Parkinson, *F. Scott Fitzgerald: The Great Gatsby* (Penguin Books, 1987), p. 86.

5) Marius Bewley, “Scott Fitzgerald’s Criticism of America” in *Twentieth Century Interpretations of The Great Gatsby* (New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1968), p. 48.

“green light”とは、過去をもう一度未来に再現しようとする夢であり、未来に無限の可能性を求めようとする夢である。

“the green light”のイメージは Fitzgerald が意識的に用いている“色彩”によって芸術的効果を高められている。この小説には、多くの色が使われている。

この小説で最も目を引く色はもちろん“green”である。“green”のイメージは、両義的で、極端に言えば、生と死を表わす。プラスのイメージとしては、生、若さ、水々さ、成長、希望、元気、安全、春、歓喜などがあり、マイナスのイメージとしては、未熟、変化、死、嫉妬、憎悪などがある。

“green”が“the green light”として、使われるのは三度であるが、“green”という言葉が使われるのはそれらを含めて17回である。“the green light”をはじめ、‘green leather,’ (p.64), ‘green jersey’ (p. 99), ‘green card,’ (p. 105), ‘green face,’ (p. 123), ‘green tickets’ (p.176), ‘green breast’ (p.182) などである。

Winter Dreams に出てくる Dexter Green の名前にも“green”が付いている。この“green”は Daisy の棧橋にまたたく“the green light”と同様に夢、希望、人生、活力を表わす色と考えられる。その対比として使われている“gray”は、夢と希望の喪失、不毛性、死を表わしている。“green”は、灰色の谷に育つ緑の小麦の例にみられるように“ash”と並行して使われている。

Daisy と Jordan が着ていた服、純粹を表わす白は、47回出てくる。白は、潔白、高貴、純粹、純潔、構成、靈的な權威、などがプラスイメージであるが、冷淡、空虚、死、幽霊などのマイナスイメージでもある。一般的に純粹を表わしてはいるものの、Daisy と Jordan が着用するとむしろ、もの憂いさ、優柔不断、そして墮落さえ表している。そして、最後には、Gatsby の死へと結びついていく。また、New York へ向かう途中、大鉄橋を渡る間に、Gatsby は、財布から“white card” (p. 68) を警官の前でひらひらと出し、スピード違反を見逃してもらおう。大鉄橋を渡ると川向うには、街の建物が汚れに染まぬ金の願いを託して建てられたものの如く、“white heaps” (p. 69) の角砂糖を積み重ねたようにそそり立ち、Gatsby たちを待ちうけている。

Jordan は、Daisy と同じく“white girlhood” (p. 20) をルイビルで一緒に過ごした。Jordan は、さらに強調して、“our beautiful white—” (p. 20) と繰り返しているのだが、ゴルフにおいても試合では不正をし、借りてきた車の幌をはずしたまま雨の中に出しっ放しにしても、平気で嘘をつく。彼女はその不正直さに加え、自分の下手な運転を注意されると、「一方だけでは事故は起こらない。不注意な人って大嫌い。だからあなたが好きなのよ。」と平然と言っている。Jordan の白に対する執着は、服装だけではなく、“powdered white” (p. 115) となっている日焼けした指にも反映され、あたかも、自己を隠しているかのようである。し

かし、Nick は隠されているものを、しっかりと目に留めている。そして、興味深いのは、Nick が Jordan の肩に手を回す時、“Jordan’s golden shoulder” (p. 81) と表現しているところである。Nick は、冷静に “white” の下に隠されている “gold” の側面を見抜いている。

黄色は22回出てくる。黄色は、明るい黄色は、太陽に属し知性、善、信仰、神性などを表わし、暗い黄色は、反逆、背信、野心、不信などを表わす。Myrtle の着用していたドレスは黄色 (cream color) である。鈍い黄色 (dull yellow) は、キリスト教では、キリストを裏切ったユダの衣服だったので、背信や欺瞞、裏切りのシンボルでもある。Daisy や Jordan と違い、Myrtle は黄色のドレスを着て、変化する。“was not attired in an elaborate afternoon dress cream-colored chiffon,” (p. 30) とあり、そのドレスを着ると Myrtle は自分の属する下層階級から Tom と同じ上層階級に入れた、と錯覚を起し横柄な態度になってしまう。それは、Myrtle が着用すると、黄色は色の中では、最下位の色である、というのを証明しているかのようである。また Myrtle は、警察犬の種類の犬を欲しがすが、実際に手に入れるのは “yellow dog”，雑種犬である。そしてその Myrtle を轢き殺してしまう Gatsby の車は、“cream-colored” (p. 64) つまり、“yellow car” (p. 141) なのだ。

赤は11回使用されている。赤のプラスのイメージとしては、情熱、幸運、夏、威厳、愛、幽鬼、積極、血、生命、太陽などが挙げられ、マイナスのイメージとしては、戦争、革命、火事、危険、犯罪、過激、流血、停止、憤怒などがある。この小説では直接、“red” を使用してはいないが、流血のイメージで強烈な印象を読者に残している。前述のとおり、Myrtle は多血症である。一度は愛人 Tom の妻 Daisy の名を呼ぶ権利があるかどうか試すように、“Daisy! Daisy! Daisy!” (p. 37) と叫ぶ。そのため階級の違う Tom に平手で鼻をぶたれ、“Then there were bloody towels up on the bathroom floor,…” (p. 37) とあるように、活力ある血を流す。二度目は前述のように Myrtle の最期で、皮肉にも Tom の妻 Daisy に轢き殺される時である。“Myrtle Wilson, her life violently extinguished, knelt in the road and mingled her thick dark blood with the dust.” (p. 138) と、彼女の活力のすべてを出し切っている。また、Wilson に勘違いをされて殺されてしまった Gatsby の最期も、“a thin red circle in the water.” (p. 153) と表現され、“the green light” を追い求め結果を “red” で締めくくっている。また、これらのマイナスのイメージとは対照的に、“red” は “red hair” の表現で3度使われパーティーに華やかさを添えている。Tom の家も、“Their house was even more elaborate than I expected, a cheerful red-and-white Georgian Colonial mansion, overlooking the bay.” (p. 6) と描かれ、堂々たる構えで中西部から出てきた Nick を迎えている。この大邸宅を構える Tom こそが、Myrtle に血を流させ Gatsby にも血を流させる張本人である。

また、青は21回も使用されている。青は有名なメーテルリンクの童話劇「青い鳥」の幸福、真実、知性、忠誠、海、空、希望、高貴、思慮、冷静、敬虔、不安などのプラスにイメージと、

冷たさ、憂鬱、悲しみ、陰鬱、失望などのマイナスイメージがある。まずは、この小説の表紙でも青が残像的に使われ、目を引いている。“a valley of ashes”の項目でも述べたが、“the Waste Land”でもあるこの地に、T. J. Eckleburg の看板がある。ここを通る者全てを見ている。

The eyes of Doctor T. J. Eckleburg are blue and gigantic—their retinas are one yard high. They look out of no face, but, instead, from a pair of enormous yellow spectacles which pass over a non-existent nose. (p. 23)

Wilson が、“God sees everything.” (p. 160) とこの看板を神のように感じているのは、“When he saw us a damp gleam of hope sprung into his light blue eyes.” (P. 25) とあるように、この看板と同様に、Wilson の目も blue だからではないだろうか。灰色に埋もれて生活し貧血気味の Wilson が自分の目が青いことで自分を神のように感じ、見間違いから、Gatsby を殺してしまう。青い目の T. S. Eckleburg が腐敗を表わす“yellow spectacles”をかけていたことにより、正しく物事を見通せなかったように感じさせている。

以上の色彩は、光線によって色を演出する場合、光を加える形で色を合成する「加法混色」で考えると、Gatsby の追い求める緑、Wilson の目、T. J. Eckleburg の目の青、そして多血症の Myrtle から流れ出る血の色の赤、の三つの重なりが、Daisy の白、純粹性を作り出しているようだ。

その他、灰色、緑は17回使用されている。そして富を誇示し雄弁学を表わす金と銀は、それぞれ金が10回、銀が11回使われている。金と銀が最も使われているのは、Gatsby のパーティーを描いた個所である。また、Gatsby の服装は、白のスーツ、銀のシャツ、金のネクタイと、Tom の伝統的な服装とは暗黙のうちに対照的に描かれている。Gatsby は Daisy に初めて出会った時、

Gatsby was overwhelmingly aware of the youth and mystery that wealth imprisons and preserves, of the freshness of many clothes, and of Daisy, gleaming like silver, safe and proud above the hot struggles of the poor. (p. 150)

と、自分と Daisy の世界の違いをはっきりと認識している。結局 Daisy は、“a hundred pairs of golden and silver slippers shuffled the shining dust.” (p. 151) に示される人工の世界に住んでいたのだ。また、Gatsby が、Nick に自分の過去を謎めいて言おうとするときは、雄弁である。ところが、ことわざには“Speech is silver, silence is gold.”とあるように、それぞれの色はそれ自身の色を示しているだけでなく materialistic な面を強調しているアイロニー

ともとれる。

また、Nick にとって金色は希望の色である。West Egg に家を借り新しい生活が始まろうとした時、一人の男に「West Egg への道」を尋ねられた後は、Nick は West Egg の市民権を得た気分になる。そこには陽光が輝き、樹々の若葉は植物の成長するさまを写した高速度映画の映像のように、勢いよく萌えている。Nick は、夏の訪れとともに新しい生命が息吹くような躍動感を覚える。そして新しい職業に関する、銀行業務やクレジットや投資信託に関する本をいっぱい買い込むが、それらは“in red and gold like new money from the mint”のように、モルガンやミシーナスなどだけが知っている秘密をときあかしてくれそうに Nick には見えた。

次に Gatsby を例に挙げると、彼はピンク色のスーツを着ている。ピンクは、元々は、健康、活力、若さ、純真、新鮮さ、の意味を持つ。ところが Gatsby がピンクのスーツを着ると、滑稽に写しだされる。また Gatsby のクリーム色のクーペは夜目にも色鮮やかである。また彼は、Daisy に彼の色とりどりのシャツを誇示している。これは、Gatsby の性格を表し、シャツは現実の持つ意味とはかけ離れてしまっている。しかし、彼にとっては彼の夢の具現化の一つである。Gatsby にまつわる色彩的描写、大邸宅やパーティー、人物、風景、自然、事件、などは、すべて単に色彩的に華美な文章を志向しているのではなく、この Gatsby の喜劇的な性格を描き出している。たくさんの色（白、黄、青、灰、緑、金、銀、黒、赤、ピンク、茶、珊瑚、藤、だいだいなど）を何度となく繰り返して使うことによって、我々の色彩感覚に強く訴えかけ、視覚的効果を高め、読者のイメージを鮮明にし、作品の幅を色彩によって広げているとも考えられる。

4. お わ り に

色彩はこの小説の世界を物質的なものとして強調しているだけでなく、Gatsby の夢がたとえ純粋なものであったとしても、時を越え、人物を越え、そして、現実をも飛び越えてしまっている。

Gatsby は現実と夢とを区別さえできないので、彼のイメージは喜劇的になってしまい色彩のもつ象徴的力は、必ずしも効果的であるとはいえない。この小説が素晴らしいものである一方で、色彩の多用が読者にどこか軽い印象を与えているのは、色彩的印象が強すぎるためではないだろうか。この点について、Lehan が、“Fitzgerald’s use of color imagery, often contradictory colors creates a further sense of the unreal.”⁶⁾と述べている通り、この小説が

6) Lehan, p. 42.

非現実性を持っているのは、色彩描写の多用が原因とも考えられる。Daisy にとっての子どももまた同じように非現実的に描かれている。Daisy が彼女の子供のことを、“You dream, you. You absolute little dream.” (P117) と呼んでいるにもかかわらず、実際にはしつけを乳母任せにしており、子供への愛情は Daisy にとって本物とは言えない。そして、Gatsby は Daisy の子供の存在を理解できないように、過去をとりもどそうとする “green light” を失ったことにも気付くことができない。Gatsby にとっても Daisy にとっても夢は、現実味を帯びていないきらびやかな幻想の世界の一部にすぎず、最終的に Gatsby の抱いていた夢は、“a valley of ashes” に打ち砕かれ、Gatsby そして Nick の描いていた新世界はすでに失われてしまっていたのである。

Bibliography

- Bloom, Harold. *F. Scott Fitzgerald's The Great Gatsby*. Chelsea House Publishers, 1986.
Brucoli., Matthew & Emory Elliott, ed. *New Essays on The Great Gatsby*. Cambridge University Press, 1985.
Curnutt, Kirk ed. *Historical Guide To F. Scott Fitzgerald*. Oxford University Press, 2004.
Dictionary of Symbols and Imagery. 1974.
Gallo, Rose Adrienne. *F. Scott Fitzgerald*. Frederick Ungar Publishing, 1978.
Goldhurst, William. *F. Scott Fitzgerald and his contemporaries*. The World Publishing Company, 1963.
Hook, Andrew. *F. Scott Fitzgerald: A Literary Life*. Macmillan, 2002.
Huonder, Eugen. *The Functional Significance of Setting in the novels of Francis Scott Fitzgerald*. European University press, 1974.
赤池鉄士著、『英語色彩の文化誌』, 研究社出版, 1981
照山雄彦著、『スコット・フィッツジェラルドー自己愛にみるロマンス』, 英宝社, 2004
宮脇俊文, 高野一良編著、『アメリカの嘆き 米文学史のピューリタニズム』, 松柏社, 1999

Summary

The Color Imagery in *The Great Gatsby*

by Yuko Yamanaka

The aim of this paper is to study F. Scott Fitzgerald's *The Great Gatsby* by means of closely examining his brilliant combination of content and imagery which greatly contributed to heightening its reputation. This paper intends to clarify the author's art of color imagery specifically focusing on the images of "ashes", "dust" and "the green light".

The image of "ashes" is used as a means of contrasting the bright side of modern society, seen in such scenes as Gatsby's party, with its dark side that indicates its barrenness and moral corruption. Characters in this novel live aimlessly without any real purpose. Through these images we can observe that each of the characters is a mere drifting existence. "The green light" which Gatsby looks for symbolizes his dream. Ironically, however, at his death he is drifting in the pool, dying with the image of a drifter who failed to achieve his dreams. Gatsby's dream, so often suggested by "the green light", finally comes to dust and ashes.

This paper also examines meanings of some other color terms used by the author, such as *white*, *gold*, and *silver*, which seem to be consciously employed by the author as part of his art.